

正装の

エッセイ集・3

井上ひさし



'82
Yam
Fuji

ジャックの正体

中公文庫

©1982

昭和五十七年四月十月初版
昭和五十七年五月十五日再版

著者 井上ひさし

発行者 高梨 茂

整版 精興社

印刷 三晃印刷

カバー トープロ

用紙 本州製紙

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

定価 二八〇円

中公文庫

ジャックの正体

エッセイ集 3

井上ひさし著



中央公論社

目次

ジャックの正体

かつて魚と鉄が戦っていた

9

レイダンボウカン

16

若者文化とテレビ——台本作家の「待罪書」

20

テレビという名の他人様

29

「ラスト・タンゴ・イン・パリ」

33

食後のつぶやき

39

検察官への逆告発

43

ある保守的文化人への手紙

48

人間ドック体験記

52

狂歌元年——一九七四年を跡づけて

ドン松五郎テレビを語る

高校野球大会初日観戦記

空手映画と田中たち

お道化者殺し——わが田中角栄論

法と作物

学力のかわりに能力を

なぜ外国語が話せないのかについて

「海外へ」と「海内に」について

憲法を生きて——破られた戦力放棄と議会民主主義

参院選の公約むなし——社会党への恋文

昔のセンス今いずこ

60

93

97

102

108

122

124

127

131

135

138

142

エンについて

146

ジャックの正体

150

歴史は地理にかなわない

歴史は地理にかなわない

157

オーストラリア通信

168

ジャックの正体

かつて魚と鉄が戦っていた

釜石、と聞いて、直ちに「岩手県の三陸海岸にある港町」と即答できる人は、かなりの物知りだといっている。大部分の人は「塩釜」と間違えて、「ああ、仙台の、ちょっと先の、松島の隣の、なんかあのへんの漁港でしょう」などとおっしゃるから、こちらはどうも先が続けにくくなってしまう。読者諸賢を小学生扱いして申し訳ないが、釜石が岩手県の三陸海岸にある港町であることを、まずしっかりと頭に叩き込んでおいていただきたい。

つづけて再び、読者諸賢を中学生扱いして恐縮だが、この釜石が、民話の故郷遠野とは仙人峠をひとつ隔てたところにあること、そして、日本のチベットなどと蔑称されているわが国最大にして、最貧の僻地、岩泉町一帯の直下にあることを、ついでに、念頭に置いていただきたい。

さて東北の、大山間僻地帯のすぐ下の、民話の故郷のすぐ隣、となると、人はいかにも鄙びた、少々荒っぽいが素朴な漁港を想像するであろう。ところが事実は大いに違うのである。東北本線を花巻で降り、釜石線に乗り換えて、寒村を通り過ぎ、小村に停車し、貧村を横切り、仙人峠を

潜り、いよいよ陰慘さと、暗さを増す車窓の光景に「さすがに東北地方はまだ開発が遅れているなあ」などと考え、「同じ日本人がこんな貧しげなところで暮しているんだなあ」と感慨にふけり、「うむ、これは日本の政治の貧困さをまるでそのまま景色にしたようではないか。なんとかしなくてはならんなあ」という義憤にかられる人が、もしあれば、（おそらく、釜石へ初めてやってくる都会人で、選挙の時に、社会党か共産党に一票を投じる方はみなそうだと思われるが）その人たちは、仙人峠を抜けてからしばらくして、やがて車窓に現われて来る光景に胆をつぶすにちがいない。なにしろ、遅れた、未開発の、貧しい東北の、そのどんづまりの地にあるまじき大製鉄所が出現し、天に向って巨大な煙突が五本直立し（これは当然だ、直立していなかったら倒れてしまう）、それらの五本の煙突は、さながら三原色だけしか使わぬ画家の筆先の如く、赤・青・黄の鮮明この上ない色煙で、大空の画布に壮大な絵を描いているのだから。

しかし、これぐらいで胆をつぶしては駄目なので、たとえば釜石駅を左に折れて海岸の方へ向って歩いて行くと、これまた東北地方にあるまじきこと、矢鱈に外国人が散策してるのを見るはずである。そしてその大通りの途中に、忽然と海が展け、その岸壁に一万トンから二万トン級の外国貨客船が数隻、横付けされているのを目撃し、税関や船舶代理店の並ぶのを見てもうひとつ胆に持ち合せがあれば、その胆もつぶされるであろう。「なんだ、これじゃまるで川崎と横浜を一緒くたにしたようなところじゃないか。東北地方らしいところは全然ないではないか」と。たしかに、釜石は奇妙な所である。事実「東北にこんなひらけたところがあっていいのだろうか」と妙な腹の立て方をする人が多く、その印象はおそらく、釜石の人々のコトバにあの東北訛

が非常に少ないことで、さらに強められる。

もっとも、どうしても貧しい東北地方を見たいという方は、外国船用の岸壁を通り過ぎて、大通りをもっと奥へ進まれるがよい。

すこしずつ家々の軒は低くなり、子どもたちの着衣も薄汚れて来、粗末な岸壁にはちっぽけな漁舟（船というには小さすぎる）がたゆたい、そのせまい甲板の上でドテラ（しかもその綻びの個所五十余、継ぎ布のあたっているところがそのうちの十いくつというようなやつ）を引っかけた漁夫たちが、これから夕餉の支度でもするのか、七輪をバタバタやりながら隣の舟の漁夫たちと、訛が強くてほとんど理解できないコトバで話しかけている光景に出っくわし「おお、貧しい人びとよ、ここに初めて東北らしい東北があった」と、旅情を満足なさることが出来るであろうから。

ところで、釜石の大通りを散歩するわれわれの前に出現した大工場や大煙突や外国人や大岸壁や訛の少ないコトバなどのおよそ、東北にあるまじきものと、低い軒や小さな漁舟やぼろドテラやひび割れ七輪や訛の強いコトバなどのいかにも東北地方然としたもの、この両者は、港町釜石の歴史や、現在かかえ込んでいるさまざまな問題をじつに鮮やかに表出させていると思う。

三度、読者諸賢を高校生扱いして悪いのだが（もっともそのたびに、小学生、中学生、高校生と程度は上って来ているけれど）、かつて、釜石は三陸沿岸随一、いや、横浜以北最大最良の漁港で（三陸沿岸には、八戸や宮古や山田などの良漁港が多いのだが、それらの強敵を向うにまわし、三陸沿岸の水揚量の三分の二強を常に確保していたのである）、秋のサンマ漁が始まると毎

年大漁につぐ豊漁で、札びらが飛び交ったといわれる。豊漁のときの北海道の鯨成金たちの切る紙幣には鱗がくつついてたというが、釜石のサンマ成金たちの切る札びらには小型サンマがくつついていたというから、貫禄が違う。漁港として賑わっていたその頃の釜石にはもうひとつの自慢の種があったが、それが製鉄業で、南部鉄瓶なども釜石産の良質鉄が原料であり、だいたい釜石は、日本最初の溶鉱炉を持ったという名誉を保有しているのである。因みに、日本で最初に鉄道が敷設されたのはどなたも御存知新橋―横浜間だが、二番目はなんとこの釜石―大橋間なので、むろんこれは、大橋で産する鉄原料を釜石の製鉄所に運ぶためのものだった。べつに「本邦初演」とか「日本一」が好きなわけではないが、「本邦初演」をもうひとつ、つけ加えると太平洋戦争中初めて（であるはずだが）米国海軍が艦砲射撃を見舞った港がこの釜石で、これも製鉄所があったためであった。

幼児雑誌の付録じゃあるまいし、そういういろいろと品目を並べるのは下らないが、もうふたつほど「日本一」を並べると、十数年前、つまり釜石港の最盛期には、人口ひとり当りのアルコール消費量が例年日本一だった（つまり、それほど、漁業と製鉄所の景気がよく、人々の財布はふくれ上り、その金を酒に注ぎこんで、港全体が浮かっていたのだった）。もうひとつ「一番」は、地図をひろげて御覧いただければ一目瞭然だが、釜石が本州で最もアメリカに近いということ、こんな一番は下らないが、土地の人はこんなことまで自慢をするのである。

話を本筋に戻すと、明治中頃までは、釜石はどちらかと言えば「漁港で製鉄所もある」港だった。いわば兄貴漁業で舎弟は製鉄所というわけである。

ここで折角、本筋に戻った話をまた傍筋に追い込むと、釜石を訪れた旅行者が奇異に思うことのひとつに、釜石を取り巻く山々の樹木が例外なく、檜やぶななどの薪炭用の木であって、遠くから一見すると、どうも禿山然としていて三陸海岸国立公園の南の起点としては貫禄がないということがある。杉なんぞ一本だって生えてやしない。これは、明治の中頃まで原料鉄を木炭で溶していたことの名残で、その当時の釜石製鉄所は一日二万俵の木炭を消費していた。一日二万俵というのは恐るべき数字で、たとえば、現在わが国の一日平均の消費量がこれとほぼ匹敵するというから、そのスケールの大きさが想像されよう。釜石近辺の山々は皆薪炭用の木に切り換えられ、一時は周囲の山々で炭を焼く煙が天を黒く焦がし、製鉄所の煙突の吐き出す煙が、火事場の横で線香が燻っているような頼りなさであったそうである。そのうちに、鉄の生産量は日本の近代化につれて増大し、とても木炭ではやっていけなくなってくる。そこで、石炭を使いだしたが、釜石の近くに炭田はなく、遠く常磐や北海道から取り寄せる外はない。どうしても燃料不足で息切れがしてくる。ここに於いて、日本政府に重視され、重宝されだしたのが北九州で、あそこは手を伸ばせるところに石炭山があるから話は早い。これは明治二十三、四年頃の事実であるが、その時以来、釜石製鉄は「本邦第一」の看板を下したのだった。が、しかし、石炭がないから製鉄所はやめて八百屋に転業します、というわけには行かぬ。釜石製鉄の経営者はここで、絶好の解決策のあることに気がついた。小さな漁舟の群がる漁港を、掘り、そしてひろげ、大岸壁を築いて、大貨物船が繫留できるようにしたらどうか、というのがそれであり、この案は直ちに実行された。この時から、鉄と魚の闘いが始まった。

釜石港は近海漁業の基地であった。その漁場を毎日平均三隻から四隻の大船舶が通行することになったのだから、魚は仰天してすこしずつ、宮古沖や八戸沖へ逃げだした。しかも、釜石港に大船舶がしげしげと出入りするということは、それだけ製鉄量がふえ、同時に大渡川おおわたりにそれだけ廃水が捨てられ、川は山の方へは流れないから、その廃水は当然、港内に流れ込み、そこいらへんを手抜きなく着々と汚染して行く。こうなると、魚どもは益々、他所へ逃げ出す。中には魚ながらも義理固いというのか、不精というのか、馬鹿というのか、港の近くを動かない連中もいたが、連中はどうも美味しくない。漁夫たちは、釜石港の近くで獲った魚を釜石の魚市場へ水揚げして金が入り、魚が食べたくなると近くの山田や宮古へ行つて、そこで改めて買って食べる、という珍現象が見られるようになり、それは今でも続いているといえる。この鉄と魚の闘いはむろん鉄の勝利で、近海で魚が獲れなくなる時期と、高度成長とやらで鉄の需要が飛躍的に増大した時期が一致したために、漁夫から製鉄所労働者に転向する人たちが、一時随分目立った。もともと、そういう転向者たちは、非転向の漁夫たちに「こうざん釜山稼かせぎ」と輕蔑されたというが。

ところで、ここ数年来、この鉄と魚の闘いの様相はかなり変容して来ているようだ。作業過程が極度に機械化され合理化されて、製鉄所労働者数がひどく減ってきたことが第一にある。

釜石は三方をそう高くはないが、険しい山にかこまれており、これ以上製鉄所の拡張が望めないということが第二にある。

原料鉄の産地の近くに溶鉱炉があるべきであるという規則はないのだから、この際、交通至便

の地へ大移転しようではないか、という考え方が生れ、実行されたことが第三にある。千葉県君津の東洋一の大製鉄所がこれで、釜石からも大勢の労働者が移動した。こうして、いま釜石には猛烈な不景気風が吹き荒れ、その風に吹き倒されて、昨年一年で、十五軒の商店が倒産した。そして軒並み半分倒れそうな現状である。なにしろ、このところ、商店街の売上げ高が、年ごとに三十億ぐらいつつ減って行っているというぐらだから、倒産が年十五軒でとどまっているのは上出来の部類かも知れぬ。人口は激減、いま七万二千。これは昭和九年頃と同じである。こうした以上は、再び漁業に依存するほかはないのだが、すでに海は死んでしまった。魚はいなくなった。そして、鉄もいなくなりつつある。鉄は魚を殺し尽くし、いま、他所へ出かけようとしているのだ。

すると、やがていつか、都会人が釜石を訪れて、こういうのであろうか、
「おお、荒廃している。貧しい。オクレテルウ。これが東北地方というものだ」